

---

# 抜魔師の助手

屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

抜魔師の助手

### 【Nコード】

N2075Z

### 【作者名】

蜃

### 【あらすじ】

小野綾、二十一歳。職なし、彼氏なし、金もなし、愛想もなし。特技は「幽霊」が見えること。ある冬の日、仕事をくれと神社に参拝した時、手違いで異世界とやらに召喚されてしまった。その上十年は帰れないと言われ、仕方なく職探し相談のために教会を訪れたところ、抜魔師のくせに幽霊が見えないお人好しな青年に雇われることになり……。

## その一

日常にひそむ非日常がその顎あぎてを開くのは、いつだって突然だ。

刷毛ではいたような薄い雲の浮かぶ青空の下を、ひとりで歩道を歩く若い女性がいた。

長くくせのない黒髪に、黒い厚手のジャケットとジーンズ、白いマフラーという飾り気のない出で立ちをしている。顔立ちはややきつめで、見ようによつては美人に見えた。鼻の頭は寒さのために赤くなり、吐き出す息は白く煙るように彼女のまわりをとりまく。

女性の名前は小野綾という。一か月前にただひとりの肉親であった父を亡くし、今は職探しのためにハローワークへ行く最中だった。

そんな綾は、彼氏なし、金もなし、愛想もなしの二十一歳。唯一の特技はと言えば……。

綾はふと立ち止まり、目の前を通過していく半透明の物体を視線だけで見送った。その半透明の物体は明らかに人間であり、足の部分だけがない。つまりは「幽霊」である。綾は幼い頃からなぜか幽霊を見ることが出来たのだ。まあ、特技と言っても役に立ったことはないのだが。

小さい頃にはよく彼らに振り回され、おかげですっかり人間不信

になってしまった。死んだあとの人間と言うのは、肉体を失うリスクがないからか、やけにはっちゃけていることが多い。その上、未練があるから成仏出来ないため、性格が非常にねじ曲がっている。

そのことに気づいたのは、何度か痛い目にあっただった。

綾は目の前を通過して近くの立派な二階建ての家へ消えた老人の霊を見てから、再び歩きだす。

彼らには関わらないのが吉である。

と言っても、見える以上はどうしても気になってしまう。そのせいで、職を転々とする羽目になってしまった。綾はため息をついて思う。あいつらが見えなくなるなら、なんだってやるのにな、と。

しばらく歩いて行くと、小さな神社があるのが見えた。鳥居の朱は剥げかけているが、手入れはきちんとされている。管理しているのは町内会らしい。小さいアパートの一室程しかない小さな建物の周りには松が植えられ、そこだけ他の風景から浮いて見えた。ここを過ぎればバス停はすぐだ。

綾はいつも通り通り過ぎようと思ったのだが、何となく立ち止まると、神社に足を向ける。どうせならダメもとで参拝していこうと思ったからだ。そして、ポケットから財布を取り出して十円を手にとると、さい銭箱に放り投げて二礼二拍手一礼の後に、つぶやく。

「どうか、次こそは幽霊に悩まされない職場に行けますように」

切実に思いを込めて言う。

その時だった。

足もとが突然光り輝いたのだ。綾は驚いて、声を上げることすら出来なかった。そのまま、地面に足がずぶずぶと埋まって行く。何が起こっているのだろう。頭が混乱して、唇をわななかせることしか出来ない。やがて、完全に首元まで埋まって、綾は意識が遠くなるままに、気を失った。

何だか痛くて寒くて騒がしい。頭が重く、鈍い痛みを感じる。

綾は唇から小さなうめき声を上げながらゆっくりと起き上がった。こじ開けた視界はぼやけていて、すぐには状況がつかめない。目の前で、何やら三十代くらいの白人っぽい男が大げさな身振りで何かを叫んでいるのが辛うじて分かる。何と言つか、とにかくうるさかった。

また、彼の叫んでいる言葉が全くわからない。英語ですらなさそうだ。

次第に目が見えるようになってくると、自分の置かれた状況の異常さに気づく。同時に、巨大な氷を飲み込んだように胃が痛み、背すじには悪寒が走った。

「ここは……私は一体」

綾は茫然と呟いて、周囲を見回した。

黄色みがかった白い石壁に四方を囲まれた室内は明るく、左手にある木製の棚には革表紙のかなり重そうな本がぎっしり並び、そのすぐ横の台には見たこともない道具がずらりと並んでいる。壁には天体や人体を描いた厚手の布が何枚も垂れ下がっていた。

部屋はかなりの広さがあり、綾はその中央の床の上に横たわっていらしい。床に目をやると、幾何学的な模様が描かれた薄い布が敷かれており、綾はその図の真ん中に座っている状態だ。

すると、涙を流しながらわめいていた男を押しつけ、五十代くらいの厳しい顔つきをした男性が綾の側までやって来て、額に右の人差し指を当てた。

注がれる眼差しが冷たい。綾は恐怖と訳のわからない事態に頭が真っ白になり、微動だに出来ないでいた。そんな綾にはお構いなく、彼は額に指先を付けたまま口の中で何ごとか呟く。

途端、それまで耳に聞こえていた音が変化した。

それまで厚いガラス越しに聞こえているかのようにぐもつていた音が鮮明になり、さらには意味すら理解出来るようになったのである。

つまり、彼らの言葉が「日本語」に聞こえるようになったのだ。

「どうかね？ 私の言っていることがわかるかね？」

「……あ、はい」

綾は突然の問いかけに、戸惑いつつも頷いた。

言葉が理解出来るようになったことで、思考する力が戻ってきたことに気づくと、自分が五人の体格の良い男たちに囲まれている状況に、綾は慄いた。

これ、マズいんじゃないの。

何をされるかわかったものではない。綾は何か武器に使えるようなものはないかと視線を巡らせると、壁に頑丈そうな杖が立てかけられているのを見つけた。だが、距離がありすぎる。あれを手にする前に取り押さえられてしまいそうだ。

とはいえ、何か対策を講じなければ、と早鐘を打つ心臓をなだめながら、すぐに動けるよう体に力を入れて構えていると、額から指がどけられ、男性はほっとしたように肩の力を抜いた。

「さて、突然のことに困っているだろうが、まずは私の話を聞いて欲しい。

まずはそうだな、ここがどこだか知りたいだろう。いいかね、こは君がつい先ほどまでいた世界とは異なる世界だ。今いるこの地はフェガルス王国が統治するラーゼという街。そして、この建物は私の家であり、今はここである試験を行っていたのだが、部下が少々やり過ぎてしまっただけ」

嬉しそうだが、困ったなと言いたげな顔で、男性は綾の返事を待たずに説明を開始した。

「実はね、一カ月後に別世界から若い娘を召喚するという儀式が控えているのだ。これは我がフェガルス王国が十年ごとに行っている

神託のひとつでね、健康な若い娘、出来れば美人が望ましいのだが、  
ともかく娘が呼び出せれば後の十年は平和が約束されるが、男や物  
や魔物が現れた場合、不吉なことが起こると言われている。

私は今回その儀式の陣頭指揮を執る事になっていてね、失敗した  
ら文字通り首が飛ぶんだ。

そんな訳で、入念に試験を重ねていたと言う訳だ。そんな中、部  
下のひとりがかうっかり召喚陣を起動させてしまったのだよ」

ゆっくりと丁寧に語られる彼の言葉に耳を傾ける内に、綾にも少  
しずつ事情がのみ込めてきた。ようするに、今後十年間の吉凶を占  
う儀式のテスト中ということらしい。

「君はたまたまその時に陣とつながる神域にいたのだろう。そのた  
め、運悪くこちらへ連れて来られてしまったと言う訳なのだよ。さ  
で、ここまでの話はわかってもらえたかね？」

「はあ、まあ、なんとなくは……」

そう答えると、男性は満足げに三回ほど頷いて、さらに語り続け  
た。

「賢い娘さんで良かった。さて、ここからが大切なのだが、娘の召  
喚は儀式の最中に成功させなければ意味がないのだよ。今ここで成  
功しても、無意味なのだ」

「……じゃあ元の場所に帰して下さい」

綾が半眼で言うと、男性はさも残念そうな顔をした。

「そうしてあげたいのは山々なのだがね、一度こちらへ来てしまっ



たら十年経たないと召喚陣が発動しないのだ。詳しい理由は明らかになっていないので説明は出来ないが、とにかく、この先十年間はここで暮らしてもらはなくてはならない。

まあ、もし君がまだ十年後、元の世界へ戻りたいと思ったのなら、また私を訪ねると良い。その時は責任を持って戻すことを約束しよう。

ただし、君が自分是我々の失敗で召喚されたということを誰かに話した場合、その瞬間に君は死んでしまう。先ほど君の額に術を掛けておいたのだよ。そうなってしまったらもう戻れないがね」

勝手に呼んでおきながらやたら理不尽なことを言うと、男性は沈黙した。

綾が何かしらの反応を見せるのを待っているらしい。激しい怒りを通り越して脱力していた綾は、大きなため息をついた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2075z/>

---

抜魔師の助手

2011年12月21日21時53分発行